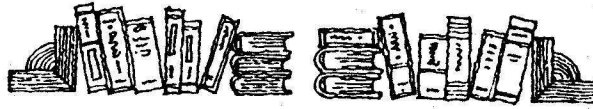


国語国文学会だより



No. 44

2011. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

平成二十二年秋大会 研究発表会・講演会 報告

平成二十二年秋大会を十二月四日(土)、午前の部は香雪館一階一〇二教室、午後の部は百年館低層棟二階二〇七教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表会) 十時～十二時五分

・村山知義『志村夏江』の成立

本学非常勤助手 鴨川 都美氏

・南台科技大学における日本語教育実習報告

——学習意欲の低い学習者に対する

対応策とその効果——※DVD使用

本学博士課程前期一年 松本亜佐子氏

・江島基礎の時代物浮世草子と演劇

本学非常勤助手 宮本祐規子氏

◆午後の部(講演会) 十三時三十分～十七時十分

・報告会「日本文学科留学生によるスピーチ」三名
古今集時代の屏風歌

本学教授 高野 晴代氏

・ことばメガネ

詩人・随筆家・翻訳家 アーサー・ピナード氏

一九六七年米国ミシガン州生れ。『釣り上げては』

(思潮社) 中原中也賞、『日本語こりぼこり』

(小学館) 講談社エッセイ賞、他

懇親会 十七時二十分～十九時十五分

於 七十年館一階生協学生食堂



講演要旨

ことばメガネ

アーサー・ピナード

携帯電話は便利だ。しかし

持つてしまうとそれに使われ捉われてしまう。GPS (Global Positioning System) 地球上のどこに居るのか捉えるシステム・大人は子供の安全のためにGPSを持たせるが、実はサラリーマンも主婦もその監視下にある。それを脱するには勇気がいる。Myboicot、自分相応の抵抗運動が大切。本来の人間について考える。何ものにも束縛されない本来の人間のあり方とは……。それには道草が一番だ。子供の頃の大人の介入しない時間、そんな道草がすごく大事だった。そこでは教わることでなくて、自分で発見することのすばらしさを知った。その記憶が本来の自分の原点である。マスコミや文明の利器と闘うために、日常生活に溢れるたくさんの情報を精査し選択する厳しい目が必要だ。自分にあつた本当のメガネを自分自身で作ろう。言葉こそ私そのものであり、コミュニケーションの最強のツールなのだから。まずはメガネを作り上げ、ことばメガネをかけて世界をみよう。

ミシガン州の昆虫少年として、ぼくは日々、トンボともカマキリともじつと見つめ合っていたが、いま思えばそれは「英語メガネ」を通しての観察だった。ことばは、コミュニケーションのツールではあるが、同時にレンズの役割も果たす。二十歳すぎから「日本語メガネ」を得て、そのおかげで世界がいつそうおもしろくなった。

『ことばメガネ』カバーより

道草途中の発見

—メガネを掛け替えて— 二年 北島礼子

小学校の勉強なんて今となつては思い出せない。算数のテストとか自由研究とか頑張った気はするのだけれど。でも、四十分の登下校でみんなで缶けりしながら帰ったこととか、夏の暑い日に大きな木の下で切り株に座つて一休みしたな、とか。どうでもいいことはかりは覚えていて。でもそんな道草が意外と大切な思い出だったりする。大人に邪魔されない、子供だけの秘密の世界。誰かに教わるのではなくて、自分で発見することの楽しさを知った。世界を広げるのはいつだって自分自身だった。

大人に近付くにつれ、道草をしなくなつた。時間追われ、数字に追われ、いつしか最短距離しか進もうとしていない自分に気がついた。風の匂いや切り株のザラザラした感触もすっかり忘れていた。ピナード先生がおっしゃるように、自分で発見したこと、子供同士の秘密ことはとても大切だ。それこそが道草のよさなのだ。人生において大切なことは案外道草にあるのかもしれない。

外に出て道草をしなくなつた私でも、道草を頻繁にする場所がある。インターネットだ。ここでは気軽に道草できる。海の向こうの情報を得ることも、地球の裏側の友達と話すこともできる。でも、バーチャルの世界では知れないことが世界には溢れていることを、ついつい忘れてしまひそうになる。大切なことは自分で感じることに。ピナード先生のお話をうかがつて、素直に感動する子供の心、ワクワクを発見できる子供の目線で見える姿勢を思い出した。

「物事を捉える時に言葉が大事なレンズになつて、言葉で捉えて、英語で捉えてみて、それで見えない部分があると、日本語で捉えてみてつていう、そういうふうに言葉をレンズみたいに使つて見つめているんだ。」

そう話すピナード先生がとても印象的だった。道草とことばメガネ。この二つは残り少ない学生生活のテーマにしようと思う。いつもと違った道を通るだけで、違う世界が広がっていく。たとえ同じ道でもことばメガネを変えるだけで、新たな発見をすることができる。一つのメガネだけでは見えない部分も、違うメガネをかけたら見えてくるのかもしれない。まずはメガネ作りにいそしもう。そして自分の世界を広げていこうと心に決めた。

買うものは個人の自由

三年 金子紗季

二十年前に日本に来て、たまたま池袋の坂下通り商店街の近くに住みついた。そして、その坂下通り商店街で、毎日のように買い物をしながら、あるいは買い物をするふりをしながら、店のいろんな方と話して、店先で日本語のレッスンを受けた。品物を挟んで色々な言葉を獲得して、言うなれば「ことばの買い物」をした感じだった。リュックには和英辞典と英和辞典、それから漢字と英語が引ける辞書の三冊を入れて、毎日そこをうろうろして、おもしろい看板が見つかる、これらを使って解説した。例えば、漢字の場合は、漢字を引いて読みと英語を調べる。次に和英辞典を引く。そして、その英語がとんな風に載っているかを見たりする。下手をすると半時も同じ店の前にずっと突っ立っているから変な人だと思われたかもしれない。でも

そのうちに、みんな顔を覚えてくれて、読み方をすぐに教えてもらえるようになって、どんどん言葉の習得がはかどるようになった。

お店での会話や街中にある看板を、すべて日本語のレッスンにしまえるピナード先生には敬服させられる。勉強をして習得していくのではなく、自ら興味をもつて、楽しんで日本語を学んでいっちゃる。

今回の御講演で初めてピナード先生にお会いしたが、ピナード先生は本当に何でも興味を持って自発的に学んでいく方だった。講演後の懇親会の際も、日本文学科の教授陣の挨拶で気になったことや興味をひかれたことを、その場でメモしていらつした。解らない言葉があつたらすぐに辞書をひく。興味をもつたことは何でもメモをとる。そういつたことを恥ずかしがらずにできるということは、大変素晴らしいことだと思う。ピナード先生は好奇心と探究心に満ち溢れた方だった。とても生き生きとされていて、輝やいていらつした。

シマウマから見える世界

三年 河村綾子

ピナード先生と日本の「シマウマ」との出会い、文房具屋の店先でした。ジョーウィンドーに「ゼブラ」と片仮名で書いてあるのを見て、まず英語の Zebra との語感の違いに驚かれたそうです。さらに英和辞典を引いて見た先生は、Striped horse をそのまま使っている日本人の素直さと、「シマウマ」という言葉の語呂のよさに感銘を受けられました。

それからしばらくして、先生はシマウマを題材にした次のような詩に出会われました。

Zebra Gavin Ewart

White men in Africa.

Puffing at the pipes.

Think zebra's a white horse

With black stripes.

Black men in Africa.

With pipes different types.

Know the zebra's a black horse

With white stripes.

シマウマ

ぶかりぶかり

パイプを吹かすアフリカの白人の男たちは思う

シマウマっていうのは

白い馬で黒の縞がついてるんだなあ

ぶかりぶかり

違うタイプのパイプを吹かす

アフリカの黒人の男たちは知っている

シマウマっていうのは

黒い馬で白の縞がついてるんだ、と

シマウマは「白地に黒の縞」なのか、「黒地に白の縞」なのか。見えやすさはシマウマの種類によっても

違うそうですが、実際にビナード先生も、シマウマは

白地に黒だと思っていざらしたという話や、広辞苑の第

二版、シマウマの欄に、「黄白地に黒の状班を有し」と

記載してあったという話から、見る人の肌の色によ

って世界が違ってくるということは、確かなようです。

ご講演ではこの後、「小学生のりゅうじくんが学校

帰りに変わったメガネ屋さんを見つけ、何でも英語の

直訳どおりに見えてしまう世界を体験する」という先



生の「著書『ことばメガネ』のご紹介があり、タツノ
オトシゴを英語では *sea horse* つまり「海の馬」という
ことなど、英語と日本語でイメーシするものが違う言
葉をいくつか教えていただきました。私はこの講演を
お聞きして、英語と日本語が混ざり合った言葉遊びの
楽しさを知ることができました。アメリカでも日本でも
言葉の世界を深めていざらしたビナード先生だからこ
そ、できる仕事なのかなと感動いたしました。

私たちはことばに踊らされるだけなのか

二年 宇野紀美

ある情報をくり返しくり返し与えると、たとえその
情報の間違っているとかわかっていても、それは無意識
の内に人の脳内を犯す。酒井法子が薬物使用で逮捕さ
れた事件が騒がれ出した頃、クリントン元米大統領が
訪朝していた。そのニュースを軸に日本の外交などに
ついて、ビナード先生ご自身がパーソナリティを勤め
るラジオで話そうとしていたが、ラジオ局の方は一個
人である酒井法子の事件の話で持ちきりで、元米大統
領が訪朝したことなど誰も気にしていなかったという
マスコミはこうして必要な情報を削って、次から次へ
と新しい情報を提示して人々の関心を引きつけようと
するので、ニュースの賞味期限はどんどん短くなる。

マスコミ、さらに言ってしまうればテレビはもはやサ
プリミナル効果をもたらすもの以外の何者でもないと思
う。無意識というのは自分では意識できないところ
だから恐ろしい。一日に何度も同じ内容の報道を見さ
せられていたら、脳が麻痺しても仕方がないように思
う。言葉の賞味期限といえは「草食系男子」だとか、
そういった言葉で溢れている。「肉食」Ⅱがついて
いる人の対義語としてすっかり定着してしまっている。
私はまだ日本語以外の言葉を深く知らないもので、
ビナード先生のような広い視野（メガネ）でものは見
ることができないが、できるだけ外部からの影響で左
右されないようにいたいと思う。

古今集時代の屏風歌

本学教授 高野晴代

当日の講演では、屏風歌の定義を押さえ、現存の屏
風や寝殿造を描いた平安時代の絵などを通して屏風歌
の実態に触れたが、本報告では貫之における屏風歌表
現の特徴に絞って考えたい。

貫之は、一千首余りの和歌を残している。その内、
約六割が屏風歌。これは、貫之の和歌の特徴を考える
のに屏風歌が必須の対象であることを示すものである
う。その六〇〇首を検討していくと、権門から賀など
の依頼であること、また絵画の装飾歌として規制を受
けつつも、詠歌において様々な実験を試みていること
に気づく。

月に琴ひきたるをききて、女
ひくことのねのうちつけに月影を秋の雪かとお
どろかれつつ
(貫之集・四四五)

月影も雪かとみつひくことのきえてつめども
しらずや有るらん
(貫之集・四四六)

をこ
ひくことのねごとにおもふ心あるを心のごとく
ききもなきなん
(貫之集・四四七)

右は、天慶二年(九三九)藤原敦忠家の屏風歌、秋の
一場面である。場面に一首ではなく、三首を配すのは、
貫之の独自の詠歌方法である。四四六では、絵では描
き得ない月の光を雪との見紛いとして表現、さらにそ
の絵に音を加え、琴の音が空に消えていくという幻想
的な世界を創り出している。絵との相乗効果を考えた
詠歌と言えようか。同屏風歌には、次の詠もある。

神の社にまうでたる

いがきにもまだいらぬ程は人しれずわがおもふ
事を神はしらなん
(貫之集・四四九)

やめなる人の家

つれづれと年ふる宿はむは玉のよもひもながく
成りぬべらなり
(貫之集・四五〇)

八重葎しげくのみこそ成りまされ人めぞ宿の草
木ならまし
(貫之集・四五二)

四四九は忍ぶ恋を詠む。そして四五〇・四五二は、
「やめなる人の家」として詠まれる。特に四五二で
は、『古今集』の「山里は冬ぞさびしさまさりける人
めも草もかれぬと思へば」を引歌に、四四九の忍ぶ恋
の情趣を受け継ぎながら、山里意識との複合によって、
沈痛さを深めていく。ここには、同屏風歌の一月の詠
み手「山里に住む女」が響いており、屏風歌自体が持
つ連作性を活かした表現と言えよう。

このように絵画とともに享受されることを狙った貫
之の手法は、絵画の限界を言葉で補い表現するもので

あり、さらには連作の上に物語の世界をも醸し出して
いくものであろう。この連作が、百首歌などにも繋がる
要素があることを以前論じた(『古今集時代における
連作表現―屏風歌の詠法を通して』『星美学園短期
大学日伊総合研究所報』三号・二〇〇七)。日本文学
における連作・群作に、このような屏風歌表現がどう
関わるか、さらに検討を続けたい。



なお、右に屏風使用例として本学所蔵の「源氏物語
五十四帖図」の「須磨」を示す。須磨流謫の折、佐
しい住まいでも間仕切りに使われている。画面、中央
に光源氏を据え、良清、惟光、右近将監らが都を思い
つつ、須磨での感慨を詠みあつた場面である。

文学散歩(平成二十二年十月二十二日)

関根 緑(四十四回)

晩秋のひとひ、恒例の文学散歩は絶好のひよりに恵
まれ、そぞろ歩きもこちよい一日であった。私達は
目白駅に集合、ここから出発する。同行四人のちんま
りとしたグループ。コースはまず鬼子母神から始まる。
参道から見上げる空にみごとに色づいた大いちょう。
神前に進み、月並みではあるが健康長寿を祈って合掌

をする。古い町なみと昔ながらの都電、世間の喧騒も
忘れて見上げる空に、薄雲が浮んでいる。おそらく何
十年も昔から、こうした「たたずまい」であったであ
ろうこの界わい。人影もなく物音さえ聞こえない。こ
れからも続いてゆくであろうこの静寂。「物がなしい」
と思つたのは、私だけの感傷であつたらうか。

再びバスに乗って、森の中にある永青文庫へと向う。
そこには細川家ゆかりの品々、特に茶道に関するもの
がところ狭しと展示され、そのみごとに細工に室町時
代の文化の粋の一端を垣間見ることができた。

さて次は芭蕉庵、ここには復元された家と碑があり、
今もこの家を守る人が常駐している。かつて神田川の
整備工事には、芭蕉も参加して作業をした記録も詳細
に残されているとの事である。そこからさらに講談社
の「野間記念館」へと足を運ぶ。をりしも美人画展が
催されており、私達は「美の競演」をたつぷりと満喫
したのである、やがて心身共にこころよい疲労を覚える
頃、椿山荘に辿りつく。ここで参加者全員での会食
となる。見おろす庭園の緑の木々に目をやすめ、喫茶
に時を過せば、それぞれの会話も今日の日にふさわし
いものであつた。ひとときの「やすらぎ」を胸にして
散会となる。めまぐるしい日常から離れ、うすれゆく
ものを取り戻すことのできためじろの文学散歩。「よ
い一日でした」そう思いながら帰途についた。

二〇二一年四月三十日

発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
千二二一八六八―東京都文京区目白台二一八一―
日本女子大学 日本文学科内